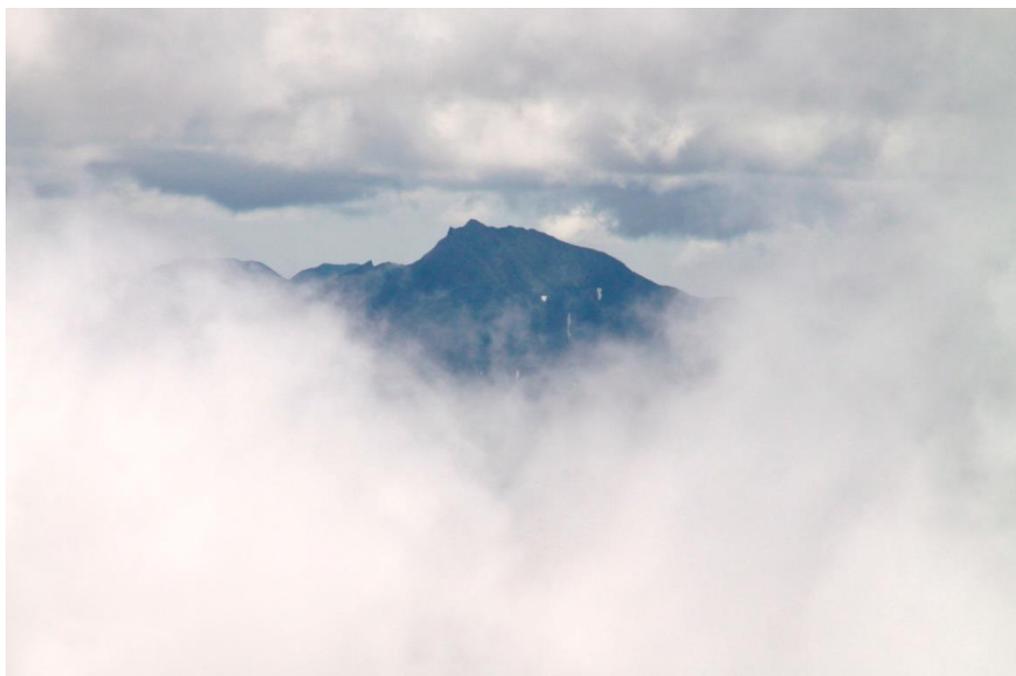


2010

# 北の大地 《夏》

—山川 花人—



R…国道

L…地方道

D…道道

Ⓜ…宿

## 7月8日(木)

自宅(16:40)——南部道路—東部道路——仙台港フェリーターミナル(17:10 19:40)

～～太平洋フェリー(北上)

(25km)

いつものように仕事を早退し、雷雨の予報のなか、急いでバイクに荷物を括りつけて出発した。日常の世界からの開放と好天が、否が応にも気持ちを舞い上がらせた。フェリーターミナルには既に5台のバイクが到着していた。乗船手続きをして待合室で休んでいると、旅行会社の添乗員が客を集め始めたが、最近では船旅を楽しむ団体の観光客が多くなった。駐車場に戻ると、バイクが15台に増えていた。

今年は山の雪解けが遅いため、高山植物の花の開花も遅れると見込んで、いつもの年より2週間遅い出発とした。

今回の旅の目的は、バイクで走り回ることとは勿論だが、3泊4日の大雪山縦走と空知川本流での大物釣り、そして人との出会いである。

## 7月9日(金)

苫小牧港フェリーターミナル(11:00)——D259——R234——早来——L10—L59—L74

—穂別(12:30 13:00)—L131—R2 —R38—富良野(15:30)

Ⓜロッチ・アイガー

(220km)



今朝のレストランは、タベとは大違いの大混雑である。レストラン入口で、待つことができない短気な人、怒鳴り散らす人など、カルシュウム不足の人達が目立つ。

口蹄疫予防のため、上陸直後の道路では強制的に消毒が行われていたが、今までには無いことだ。勇払原野のサラブレッド牧場で馬の歓迎のんびりと受け、舗装の裂け目に草が生えるほど車の通らない、緩やかな起伏を繰り返す農道のワインディングを楽しみ、鶴川沿いの走り慣れた快適な道に、Vツインの乾いた鼓動が刻み込まれていく。日高峠、金山峠を一気に走り抜けると、もう富良野は近い。まだ時間があるので、釣り場の下見をしたが、川の水色はいかにも釣れそうな色をして流れているが、今年もバツタの姿が見られない。

早めにアイガーに着き、久しぶりの再開を喜んだ。明日以降の天気は良くないので、予定していた大雪山縦走は延期し、釣りをするために餌を買いに行ったが、そこで予期せぬ情報を得た。一昨年大物を釣り上げた西達布川は、昨年ネット上に、60cmのニジマスが釣れると流され、それを知った釣り人は全国から押し寄せたという。昨年、川沿いのブッシュに踏み跡がおびただしかったのはそのせいだ。東京から飛行機で来て、レンタカーで乗り付けて釣りをしていく人もいろいろいるらしいが、短絡的思考の釣り人だ。

## 7月10日(土)

ロッヂ・アイガ(4:40)ー空知川・西達布川合流点ーロッヂ・アイガ(8:00 11:00) ー布部川ー西達布川ーロッヂ・アイガ(16:30)

Ⓜ ロッジ・アイガ (101km)

4時頃目を覚まして外を見ると、暗い雲が重く棚引き、今にも雨が降りそう。すぐに起きて釣りの準備をし、ウエダーを履いたままの姿でバイクにまたがった。国道から分かれて砂利道を暫らく走り、左に急カーブするところから合流点に入れそうだった。今回の目的地の空知川本流と西達布川の合流点を見つけるのに3年かかった。思ったより簡単に川に出ることができたが、そこはまだ支流の西達布川で、50mほど川を下ると合流点となり、急に視界が開けた。川の両岸は護岸されることなく木々に覆われ、豊かな流れが左にカーブをし、右側の岸をえぐり取っている。いかにも大物が潜んでいるような原始的な雰囲気だ。



空知川



本流に西達布川の流れがぶつかり合い、流れが淀むポイントを見定め、ハリス 1.7 号通しの仕掛けに大型ミミズを3匹房掛けし、7.2mの本流竿で振り込んだ。流芯を外しているわけではないが、何度流してもピクリともしない。長竿のため片手で流すのが辛くなる。そもそもこのような大場所のポイントは餌釣りではなく、ルアーかフライのほうが釣り易い。しかし、リールを使って魚とやりとりするのは嫌いだ。リールのドラッグで騙し騙し弱らせて釣るのではなく、直に魚の力を受け止めて勝負したい。その結果、糸を切られたり、針を外されたりしたらそのファイトに敬意を表する。そんな大物に巡り逢いたいと思いながらひたすら流し続けていたら、かすかに目印が異常な動きをした。もしやと思いながら手首を返して合わせると、何度経験しても緊張と興奮を覚える感触が、疲れ切った右腕に伝わってきた。竿は大きくしなり、獲物は沖へと走り出した。しかし、思い描いた大きさの力ではない。暫くして水面に顔を出してきたのは良型

のニジマスだった。本州では大喜びしそうな型であるが、50cmオーバーを思い描いているものにとっては物足りない。その後も2時間ほど流し続けたが、同じような型のニジマスとアメマスが1匹ずつ釣れた。腹が減ったのでアイガーに戻り、朝食を食べた後、午後に備えて寝ることにした。



空知川のニジマス



午後の本流は、上流のダム放水のために水位が上がり危険なので、西達布川で釣ることにしたが、その前に布部川で試してみることにした。いつも簡単に捕れるバツは、時期のせいかもしれない。仕方がないので、ブドウムシを流したが、魚が舐めているような感触は伝わってくるが食いが悪い。雨で雪解け水が増え、水温が低下したためかも知れない。

雨の中、西達布川に行ってみると、入渓地点に旭川ナンバーの車が止まっていた。どうやら上流に釣り上がったようで釣り人の姿は見えない。先行者のために警戒心の強くなった魚にあえて挑戦することにした。しかし、釣れてくるのは無警戒の食べて一番おいしい大きさばかりだ。大物用の針は飲み込めないで、針を持って、魚体に触れることなく簡単に放流できる。場所を変えることにしたが、2日前の雨のため水量が増え、一番期待できる場所に行くのは危険なので、比較的安全な場所へ移動した。

橋のもとに蛇の抜け殻があった。去年出迎えてくれたアオダイショウが一段と大きくなったようだ。笹を掴みながら滑りやすい急な崖を降りたが、いつもながら何かが出そうで気味が悪い。このポイントも放流サイズばかりで、本当に場荒れしている。それでも一匹だけ、釣り竿を満月に絞り込むファイトを見せたニジマスが釣れた。合流点で釣れたのより大きい満足できる型ではない。時間に余裕があるので合流点に行ってみたが、やはりダム放水のため、川幅が倍になるくらい水量が増えて餌の流しようもなく、渦を巻いている急流に身の危険すら感じるので早々に引き揚げた。

昨日からアイガーに泊っている台湾の家族と夕食を共にした。両親とその息子夫妻と子供2人の家族で、毎年日本に観光に来ているという。息子は少し日本語ができるし、台湾の人は漢字を書けばわかるので話は通じる。おじいちゃんは高校のコンピューターの先生、おばあちゃんは中学の化学の先生、嫁さんは小学校の先生で自分だけ先生ではないと肩身の狭いような言い方をしていた。当の本人はバイオ関係の会社に勤めているらしい。みんな気さくな人で、話しているうちに、台湾に来たら是非案内したいとか、メールアドレスを教えてと話しが盛り上がった。

7月11日(日)

ロッヂ・アイガー(9:30)R38—彩香の里—R237—美馬牛—美瑛パノラマロード—美瑛パッチワークの路—四季の風《昼食》(14:00 15:00)—美馬牛—L70—D759—ロッヂ・アイガー(17:00)

Ⓜ ロッジ・アイガー (133km)

今朝は晴れているが、依然としてアイガーの前に見えるはずの十勝岳連峰は雲の中だ。台湾の家族は札幌に移動するため、荷物をレンタカーに積み込み始めた。一緒に写真を撮りたいと云うので家族の中に入ったが、おじいちゃんのカメラはイオス5D マークⅡで、レンズも24mm～105mmのLレンズの高価なものである。後日、その時の写真を台湾からメールで送ってくれた。

今日は良い天気だが、明日の予報は全道的に雨だ。サロベツに行く予定を変更して、富良野、美瑛の丘を走り回ることにした。彩香の里にラベンダーを見に行ったら、半分くらいが中国系の観光客だ。国道を走っていてもおもしろくないので、美馬牛からまだ走ったことのない左方面の道に入った。

波打つように広がる丘を幾つも越えて走るのは楽しい。丘の上を目指してスロットルグリップを全開にし、頂上の直前で一気に戻すと、瞬間的に無重力状態になり宙に舞い上がる。直後に今までとは違う黄色い麦畑が目の前に広がり、左に曲がりながら下っていく。身体を左に倒し、シフトダウンをしながらエンジンブレーキを効かせて下りきると、今度は緩やかな右カーブを描きながら登って行く。左に倒していた身体をニュートラルポジションに戻し、ライン取りを瞬時に確認しながら右に倒しこみ、予測ラインを無修正のままトレースし、カーブの出口で思いっきりスロットルを全開にする。1550ccV ツインのエンジンから、数えられるほどのタイミングのトルクフルな排気音を地面に叩きつけ、身体を置き去りにされそうにしながら加速して行く。そのたびに十勝岳連峰の山麓の広がりや右に流れ去ったり、真正面に現れたりを繰り返す。

美瑛の国道東側の丘はほとんど走り回り、今度は西側を走ることにした。しかし、東側と比べてあまりにも車が多い。これでは農家の人は仕事にならない。狭い農道にも大型バスが入ってくる。東側の自然な雰囲気に対して、パッチワークの丘とか、マイルドセブンの丘とか、ケン&メリーの木とか訳のわからないものまで作られ過ぎている。ここで景色を眺めながらお昼を食べようと思っていたが、とてもその気になれず、美瑛の町に降りてガソリンを入れたついでに、おいしいそば屋がないかと聞くと、新栄の丘の手前に評判の店があると教えてくれた。ガソリンスタンドの人は、ここからだとは分かりにくいと言っていたが、何回も通っているところなのですぐにわかった。道路から50mほど奥まった林の中にあった。2時を過ぎていたにもかかわらず店内は混んでいた。レコードプレーヤー、真空管を使ったアンプ、手製の木製スピーカーボックスがところ狭しと置いてある。この店のオーナーの好みらしい。暫らく待たされて出てきたとろろ蕎麦は、蕎麦の味が口の中に広がりおいしかった。蕎麦をもっと冷やしてくれると最高だったのだが。

帰りは、富良野まで国道を全く通らなくてもよい道を見つけた。車は通らないし、道は新しく景色は良いし天気は良いし、約30km弱をノンストップで走り抜けることができた。

富良野デリスに寄って牛乳プリンを家に送ろうとしたが、店の外まで並んでいるのを見て諦めた。今日は日曜日だった。



彩香の里のラベンダー

美瑛の丘



7月12日(月)

ロッヂ・アイガー(12:40) — 富良野駅(13:12)—(JR)—旭川駅(14:25)(15:30)—(道北バス)—天人峡温泉—旭岳温泉(17:30) ㊦ 白樺荘 YH (0m)

今日は朝から雨が降って、次第に風も強くなり嵐になってきた。昨日道北に行っていたら、今日は悲惨な一日になっていただろう。天気予報では明日以降3日間は天気が良いので、今日のうちに登山口の旭岳温泉まで行って、明後日登山をすることに決めた。今年の北海道は天気が目まぐるしく変化するので、当初の3泊4日の縦走ではなく、2泊3日の銀泉台下山コースに変更することにした。外は土砂降りのため何もできないので、午後の出発に備えて登山の荷物の準備をのんびりと始めた。それでも時間を持て余したので寝ることにした。お昼は、アイガーの佐藤さんの作ってくれたおいなりさんをおいしくいただき、長男の光彦さんに富良野駅まで送っていただいた。登山口と下山口が違うので、公共交通機関を使うことしたのである。旭川までの車窓の景色は大雨のためほとんど見えない。旭川駅に降りたものの、バスターミナルのようなものは見当たらないので、観光案内所で聞いた時、案内のおばさんが、「明日は晴れるよ。」と笑顔で言ってくれた。ほぼ満員の旭岳温泉行きのバスは出発したが、定期バスのバスではなく、観光バスのバスで非常に快適だ。途中、天人峡温泉で休憩をして旭岳温泉に到着した時、一面濃いガスに覆われていたが、今日の宿の白樺荘 YH はすぐ目の前だった。

フロントが混んでいたため手続きに時間がかかった。部屋に入ると若い外人の先客に、いきなり「デビッドです。よろしく」と挨拶をされたので、「ドモンです。よろしく」と挨拶を交わした。なかなか感じの良い青年なので、一人旅同士、夕食も一緒に食べることにした。カリフォルニア大学の大学院生で、数年前に日本に留学していたため日本語が堪能だ。日本の環境の変化、文化の変化に興味があるらしく、「今の日本で、日本らしさが残っている所はどこですか」というので、あえて京都とは言わず「東北地方だね」というと、「東北のどこですか」と聞いてきた。すかさず「庄内地方だね」と言い、そして、「京都の文化が北前船の交易により伝承され」と話すと、「今までの庄内の文化と融合し、独自の文化が出来上がったのですね」と目を輝かして話してきた。さすがに北前船のことは知らなかったので説明したら「いつの時代ですか」と聞いてきた。「江戸時代後半から明治時代かな」と言うとな納得していた。日本史もある程度わかるみたいだ。デビッドはきっと庄内地方に行くと思った。あまりにも頭脳明晰な話し方に感心して、「なにを勉強しているのですか」と聞いたら、「進化生物学です」と言う。若者でこんなに「頭いい」と感じたのは久しぶりで、柔軟な考え方と正確な日本語の話し方から、日本人より日本人らしく感じられた。途中から、千葉から来たという50代後半の一人旅の女性が話に加わってきた。山が好きで、一緒に行こうと友達を誘っても誰も行かないので、以前はツアーに参加していたと言っている。しかし、自由に行動できないので嫌になり、それ以来単独行にしたそうだ。昨年のトムラウシ山の遭難事故以来、ツアー登山の是非が論じられているが、山は自己責任で登るのが基本で、リスクが伴うとしても単独行が一番楽しい。

このユースは何度利用しても快適だ。温泉付きで食事が良いし、酒も自由に幾らでも飲めることもあり、本日も50名以上の大繁盛だ。こうなるとユースと旅宿の違いは何だろう。最近のユースは旅宿よりも自由になってきている。ユースも旅宿も男女別相部屋で二食付き五〇〇〇円以内。最近はどちらも千円アップで個室も用意できるようになった。

## 7月13日(火)

白樺荘 YH(5:30)ーロープウェイ旭岳温泉駅(6:00)ー姿見の池駅(6:10)(6:40)……旭岳[2290. 3]  
(9:00)(9:20)……間宮岳[2185](10:25)……北海岳[2149](11:50)(12:30)……白雲岳[2229. 5]  
(15:20)(15:50)……白雲岳避難小屋テントサイト(16:30)      ㊤ 白雲岳テントサイト      (0m)

4時過ぎ、異様に明るいので起きてみると、昨日の天気が嘘のように晴れ渡り、黒い塊の旭岳が白樺の林越しに見えた。朝食のおにぎりを1個食べているうちに山は一瞬のうちにガスで覆われてしまったが、上空は間違いなく晴れているので心配はしなかった。やがてガスが流れ去り、一段と明るくなった旭岳が姿を現した。上空の白い雲は

左から右方向にかなりの速さで流れている。反対にガスは右から左方向にゆっくりと流れている。この付近はほとんど無風だが、山の上はかなりの強風が予想される。ロープウェイの始発が6時なので、5時半にユースを出発したが、ロープウェイ駅はすでに長蛇の列だった。観光の団体客が大半

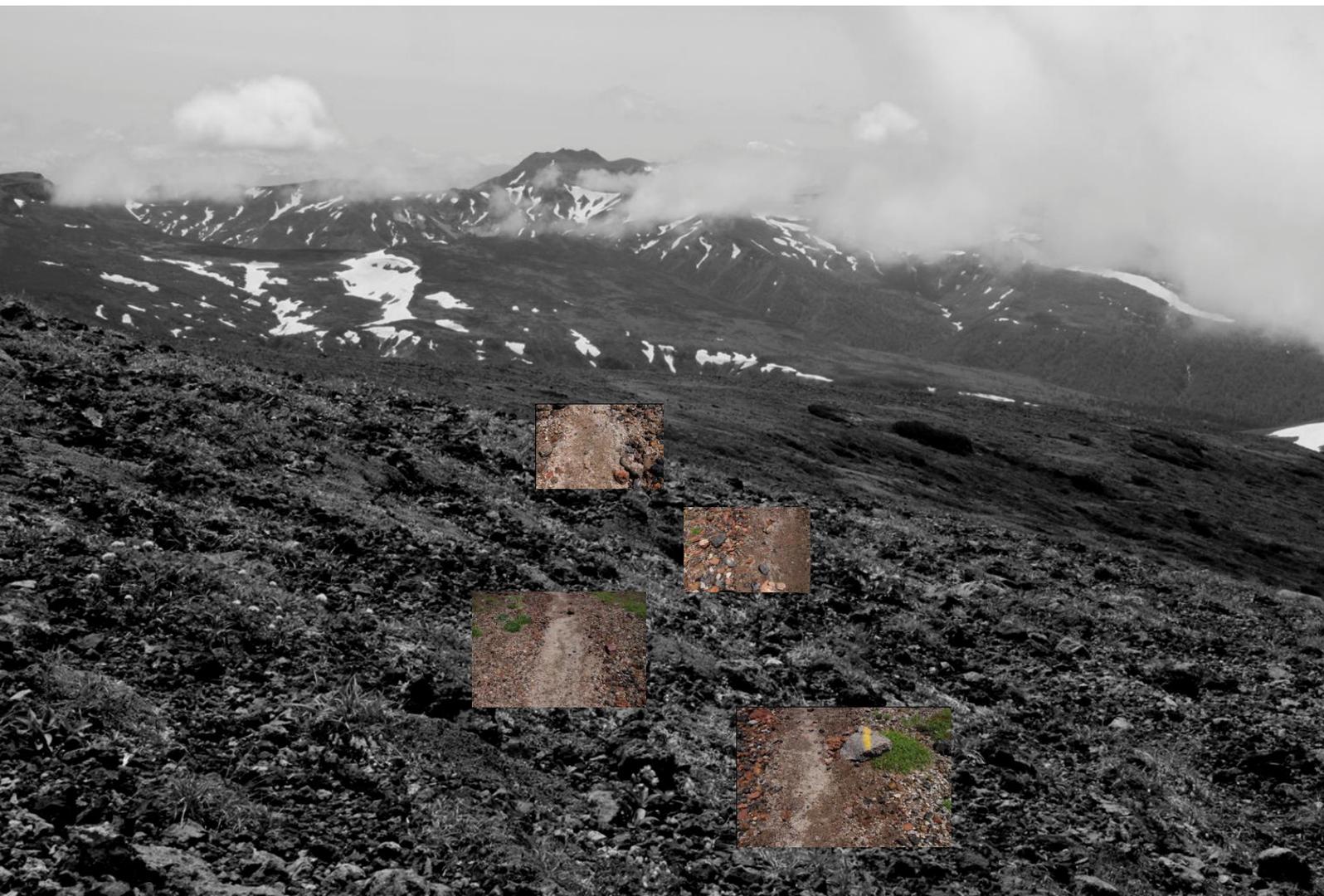


を占めていたので、始発乗車は諦めていたら、駅員が「一人の方あと5人」と言っているのが急いで前に行ったら運良く乗れた。標高1600mの姿見の池駅で高度計を合わせ、ストレッチを十分に行い、標高差700mの旭岳に向けてゆっくりと歩き始めた。旭岳の真後ろから太陽が昇っているので、逆光のため真っ黒な山塊に、噴煙が朝日に輝くレースのカーテンのように棚引いている。散策路の周りはチングルマ、イワカガミなどが咲き乱れている。姿見の池から先は完全な瓦礫の登山道となり、極端に人は少なくなった。風が強く、体温が奪われることが予想されるので、今のうちに雨具を着ることにした。ここからは高山植物も無いガレ場の急坂の連続で、トムラウシ山と十勝岳連峰の山並みが 唯一の慰めである。それにしても想像以上の強風で、時々よろけ、息が出来なくなるくらいだ。風でコロコロと小石が転がる音が不気味に響く。先ほどから後ろにピッタリと付いてくる人がある。なんか気になるので、先に行ってもらおうと立ち止まると後ろの人も立ち止まり、正規のルートを少し外してもピタッと付いてくる。どうやら自分を風除けに使っているようだ。あまりの強風のために途中で戻ってくる人達もいる。しかし、この風向きからすれば、頂上の先の縦走路はそんなに強くないはずと思いながらひたすら我慢して登ることにした。晴れているからいいものの、雨が伴ったらかなり危険な状態になると予想されるが、その前に、そんな時は登らない。1時間半ほど登って大きな岩陰で休憩をすることにした。ピッタリついてきた人も「すごい風ですね」と言いながら震えている。50歳前後の男で麦藁帽子を片手で押え、半袖姿だ。給水をしながら「カップを着たほうがいいよ」と言うと、「この風でどうやって着ればいいのかなあ」と麦藁帽子をザックにしまい、カップを出したが風でたなびいて思うように着られない。漸く、どうにか着ることができて落ち着いたのか、滋賀から一人で旅しながら山にも登っていると話しかけてきた。「ここでまだ半分くらいだよ」というと、「まだそんなにあるんか」と頂上の方を見上げている。あまり休むと体温が

低下するので登り始めたが、今度は後ろからのべつまくなしに話しかけてくる。しかし、風のためほとんど聞き取れないので返事もしないで登っていたが、それでもお構いなしに話しかけてくる。こちらは静かに登りたいのだ。頂上近くになって風が弱まり、呆気ないうちに頂上に着いた。大雪の山々は勿論、石狩岳、トムラウシ山、十勝岳連峰、ニペソツ山、雌阿寒岳、芦別岳、夕張岳、暑寒別岳、羊蹄山まで見渡せる。風が強くて三脚が立てられないので、男にシャッターを押してもらい記念写真を撮った。男は登ってきたルートを降りると言っていたが、つつい余計なことを言ってしまった。「時間に余裕があるなら中岳の天然温泉に入り、裾合平を經由して姿見の駅に行くといいよ。ただし、温泉と言ってもお湯だけ沸いていて何も無いよ。周りに人がいなければ入れるけど」と言うとき異常なくらい興味を示した。「ここから1時間ほど行くと間宮岳があり、そこで左方向に曲がり、中岳分岐の標識でまた左に曲がって下れば迷うことはないから大丈夫」と言うと、「心細いから間宮岳まで一緒に行ってください」言われ、裏旭岳の急斜面の雪渓をまたまた一緒に下るはめになった。相変わらず後ろから心細いを連発している。心細いと思うなら一人で山になんか来るなど、心の中でつぶやいた。



旭岳頂上直下の金庫岩



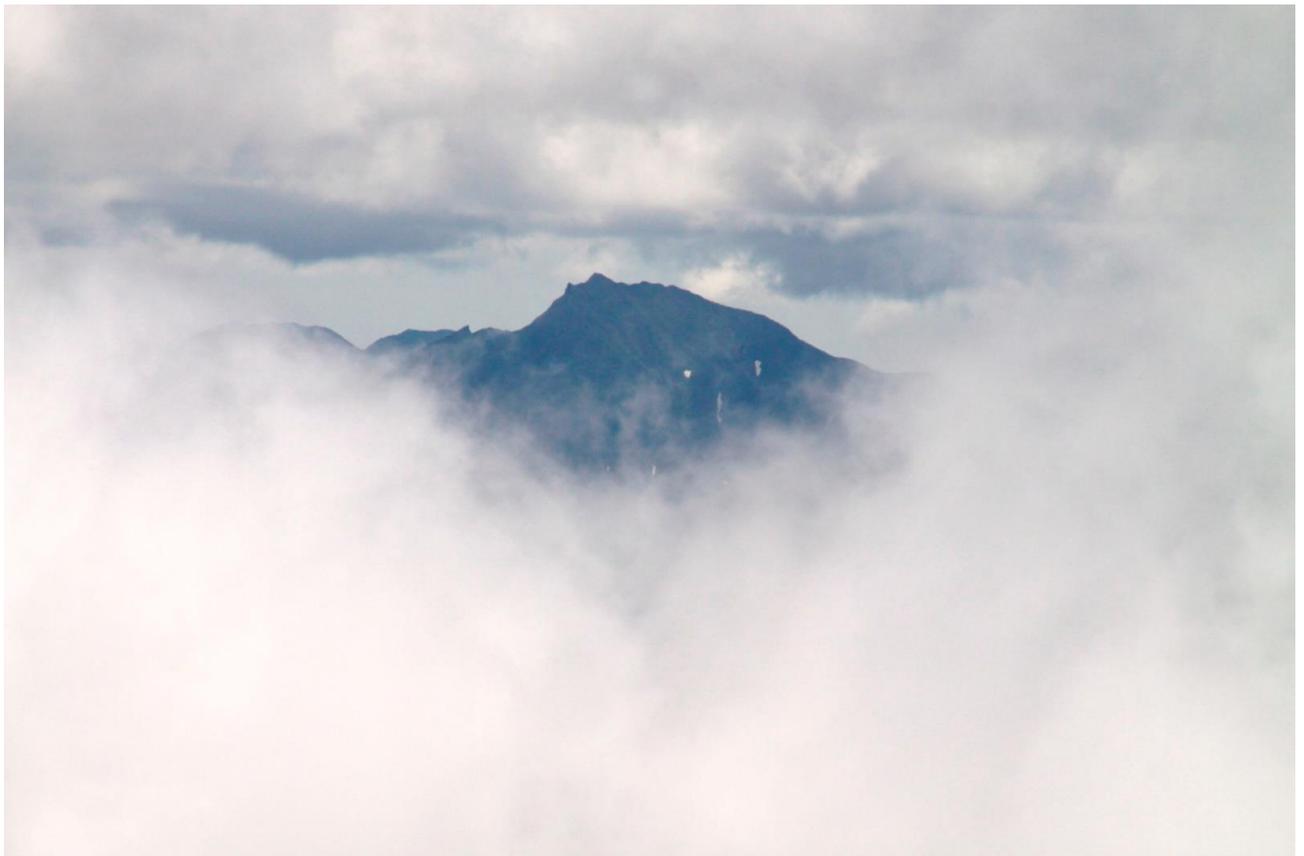
トムラウシ山を横目にひたすら登る



熊ヶ岳



トムラウシ山



ニベツ山



大雪山御鉢平



山とは関係ないようなことまで話しかけてくるので我慢の限界を超え、雪渓を下りきったところで「用足しをするので先に行って。今日はガスの心配がないから迷うことはないから」と先に行かせた。遠くから時々振り返って見ている。姿が見えなくなってから行くことにして捕食を食べたり、写真を撮ったりして休んだ。やっと静かになった。風はほとんど無くなり暑くなったので雨具を脱いだら、爽やかな風が吹き抜けた。ここから間宮岳までは緩い登りだが、こんな天気のもとでの登りは全く苦にならない。イワブクロの花が盛りだ。左に荒々しい熊ヶ岳の大雪渓、右には5年前に登ったトムラウシ、そして2年前のニペソツが特異な山容を見せている。

大学4年の時、自転車北海道ツーリングの途中に層雲峡のキャンプ場にテントを張り、大雪山に登った。層雲峡ロープウェイはその時からあったが、山に登るのにロープウェイなどに乗るのは邪道だと一番下から登った。急勾配を苦勞して登っている時、頭上をロープウェイが通過していったが、「この軟弱者め」と強がりを言ったのを覚えている。黒岳からお鉢を左周りで登り、北鎮岳でガスがかかり、頂上の祠(だったと思う)で暫らくうづくまって休んでいたのが鮮明に蘇った。間宮岳から旭岳を往復する時、このあたりは走っていたのも覚えている。そして、北海岳、黒岳を經由してその日のうちに下山したのだから、当時の体力はとんでもないものだったのだろうが、無謀以外の何物でもなかった。



イワブクロ

そんなことを思い出しながら登っていると間宮岳の頂上が近付いてきた。なんと、先ほどのうるさい男が手を振っているのではないかと待っていたのだ。「中岳温泉から姿見の駅までは、思ったより時間がかかるから早く行ったほうがいいよ」とせかしたら、ここを通った登山者に、「中岳温泉付近は熊が多いから気をつけて」と言われ、心細くなったとまだ言っている。中岳温泉まで付きあわせられそうな雰囲気になったので「熊は大丈夫。私が行った時もいなかったから」と、なんの根拠もない言い方をし、その時の時間が10時半だったので、どんなに道草をしてもロープウェイの最終便には間に合うことを確認して、「あなたは左。私はこっち」と右方向へ歩き出した。ここから北海岳までは起伏のほとんど無いお鉢の稜線歩きが続く。まだ有毒ガスを噴出している異様な光景のお鉢平を下に見下ろし、真正面の遠くに独特の山容の黒岳、左には桂月岳、凌雲岳、北鎮岳の雪渓が眩しく輝いている。北海岳で360度の展望を楽しみながらのおにぎりは最高においしい。ここは黒岳方面からの登山者と銀泉台方面からの登山者が集まってくる。口を揃えたように、こんな天気はめったに無いと言い合っている。北海岳を下ると大好きなエゾコザクラの群生があり、エゾツツジ、エゾノハクサンイチゲ、キバナシャクナゲ、チングルマ、コマクサなどが咲き競っており、写真撮影に時間を取られ先に進めない。白雲岳手前の大雪渓のトラバースの前で、一人の若い女性が仰向けになっていびきをかいて寝ている。すごい度胸だ。トラバースが終わった所でエゾノキンバイの黄色とエゾノハクサンイチゲの白、エゾノコザクラの赤紫の大群落があった。以前、ガスのなかで昼食をとった時休んだ大岩は、当時のままに時間の経過を感じさせないように同じ位置にあった。



エゾノハクサンイチゲ



一面お花畑



キバナシャクナゲとトムラウシ山



イワウメ



大雪溪のトラバース

白雲岳分岐にさしかかると、左手の赤岳方面より一人の男が殆ど同時に分岐点に到着した。旭岳方面は植生が貧困のようだから予定を変更して、高根ヶ原方面にしようと言っている。ひとしきり情報交換をした後、ザックを分岐点にデポし、カメラだけ持って白雲岳に向かった。標高2000mを超えたあたりでウサギが草を食べていたので、写真を撮りながら近づいたら軽やかに岩陰に消えた。

エゾユキウサギ



白雲平とトムラウシ山



白雲岳頂上からの旭岳方面の雪渓の縞模様はデザイナーがデザインしたかのように美しく雄大だ。そして、高根ヶ原の彼方に聳えるトムラウシ山方面の圧倒的空間の広がりや写真は撮りようがない。頂上からの展望でこれほどの景観は今まであっただろうか。風も無く穏やかだし、今日の宿泊予定地も近いので、一人腰を下ろしてぼんやりと眺めていた。やがて先程の男が登ってきて、

あまりの美しさに「日没まで眺めていたいね。」と言っているが、その通りだ。頂上で男二人だけ取り留めもなく話していたが、このロケーションのもとではすぐに気持ちも打ち解けあうことができた。「登山は自分との対話だ」と、全く自分と同じことを言っている。ましてやバイクが共通の好みとなればなおさらだ。さすがに、しばらく頂上にいたら寒くなってきたので下山し、今日の宿泊予定地の白雲岳避難小屋を目指した。関水と名乗る50代後半の男は、白雲平の広大なフラット地形を懸垂氷河だとこだわっているが、私は火口原だと主張した。関水さんの話の内容から推測すると単なる山好きのおっさんではなく、ただ者ではないと直感した。しかし、一人の人間として対峙したいから、旅先では現実的な話はしたくない。職業とか、地位がわかってしまうと、どうしてもそんな目でみてしまう。

白雲岳頂上で時間を費やしたので、テントサイトに着いた時にはすでに17張りのテントが張ってあった。当初、小屋に泊まろうと思っていたが、関水さんの勧めもあり、このロケーションを見た途端にテントを張ることにした。設営後、私は自家製のサルナシ酒で、関水さんはウイスキーで乾杯。山では絶対ウイスキーに限るという彼に、私はサルナシ酒だとお互いに分け合って飲んだ。今日の夕食はラーメンにフリーズドライの牛丼で、このような状況下においては何を飲んでも、何を食べても高級レストランの料理にも優る。食後は娘からもらったコーヒーをドリッピングして、暮れなずむ目の前の雪渓を眺めながら飲んだが、今日の10時間の歩きの疲れを忘れさせてくれた。急に寒さを感じるようになったが、雪渓の下の窪地にテントを張っているのだから、冷蔵庫の中にあるようなものだ。インナーダウンやら持っている着物を全部着ても寒くなりそうなので、ゴアの雨具も着て寝袋に入ったが、軽いからと持ってきた夏用の寝袋では通用しない。関水さんが隣のテントでラジオをかけていたが、明日の夕方から天気が崩れると予報している。予定では、ここに2泊して高根ヶ原の一番おいしい所を楽しみ、銀泉台に下山しようと思っていた。もし、明日の夜に雨にあたったら、今日の感激が失せてしまうかもしれない。判断は明日の朝の様子で決めよう。ラジオは鳴っているが関水さんのいびきも聞こえてきた。何の音もしないテントサイトでは、ポリウムを落とした音でも響きわたるので、「関水さん、ラジオを消したほうがいいよ」と言うと、すぐに消してくれた。



白雲岳頂上より旭岳

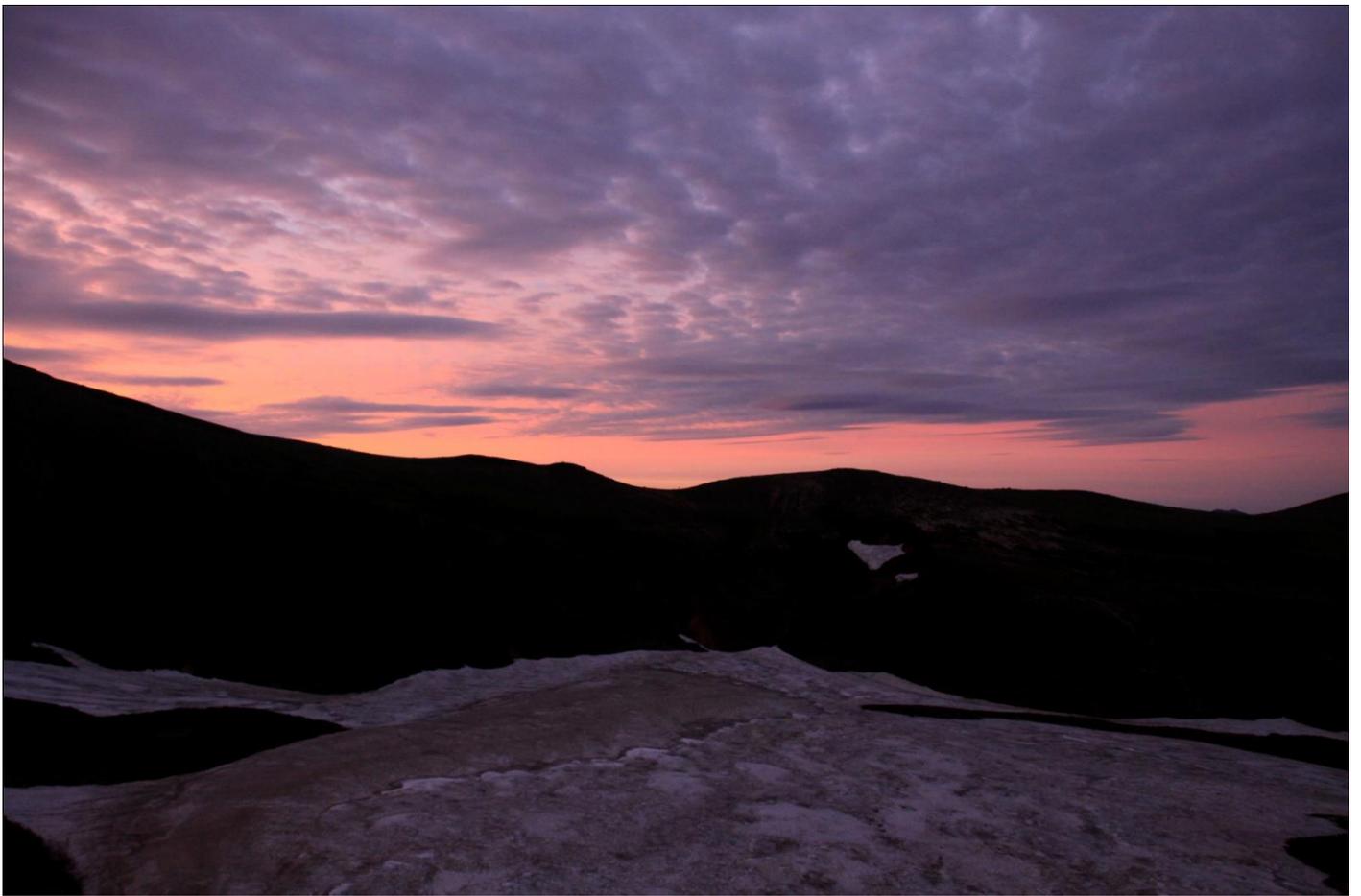


白雲岳頂上より高根ヶ原とトムラウシ山



白雲岳避難小屋テントサイト・関水さん(左上)





夕焼け





朝焼け



## 7月14日(水)

白雲岳テントサイト(6:40)……高根ヶ原……三笠新道分岐……平ヶ岳手前(9:00)……テントサイト(11:00)(12:00)……白雲岳分岐(12:30)……赤岳[2078.0]……銀泉台(15:50)(16:00)——R273——三国峠——糠平——L85——然別湖——R274——鹿追——L133——L75——新得——R38——狩勝峠——R38——富良野——ロッヂ・アイガー(19:10)      (H)ロッヂ・アイガー (0m)

テントサイトの朝は早い。2時半頃から動き出している人もいる。テントを開けて空を見上げると、空一面薄雲に覆われている。午前中、高根ヶ原で遊んで午後銀泉台下山に変更することにした。関水さんも同じ判断をした。隣のテントの人は初志貫徹と4時にヒサゴ沼に出発して行った。早い人は3時過ぎに出発する者もいた。朝焼けが始まりそうだったので、カメラを用意して小屋の側に登った。西から北へ帯状に伸びている白い雲に、朝日が反射して赤味をどんどん増してきた。そして、1分もたたないうちに消えかかってきた。大きな三脚と大型カメラを持った人が慌しく準備を始めたが遅かったようだ。テントに戻ろうと振り返ると、トムラウシ山が赤く染まり始めた。美瑛方面から沸き上がってきたガスが、高根ヶ原の鞍部を越えて高原沼の方に流れ落ちている。トムラウシ山の山頂部分と白いガスが一際赤く染まったが、それも数秒で終わった。明るくなるのを待って、朝食の準備を始めた。時間的に余裕があるし、今日一日は天気も大丈夫のようなので気持ちにゆとりが出てきた。

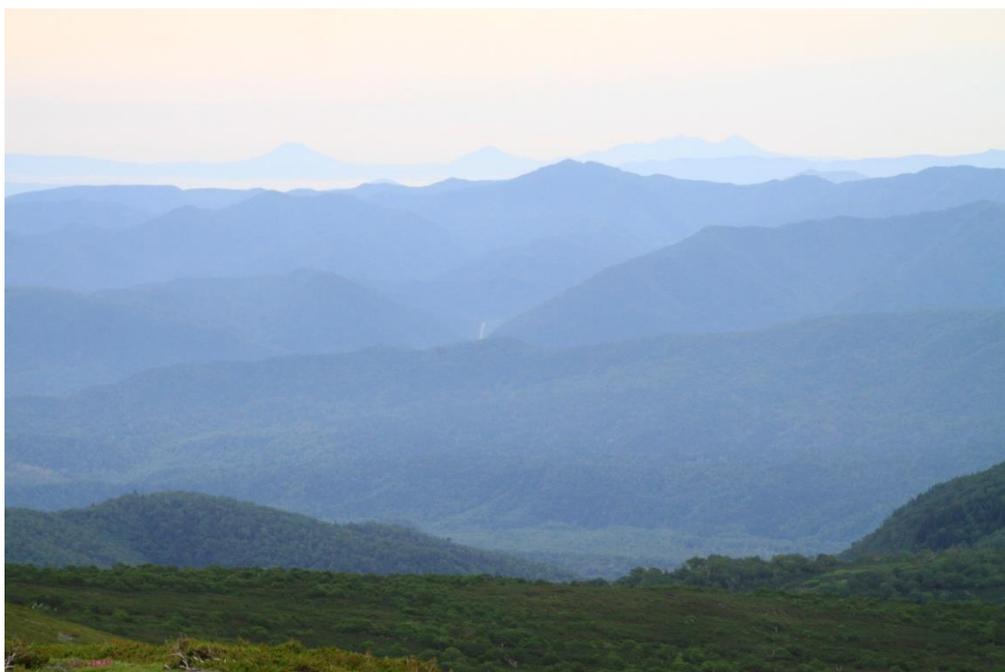
隣の関水さんの姿が見えないことに気がついた。テントはそのままだし、朝食を食べた気配はないが、早々と高根ヶ原に出発したようだ。寒いので、朝食はラーメンとチキンカレーにすることにしたが、その前に、朝のコーヒーを一杯。当初の予定の天人峡への縦走の場合はこんなにのんびりしてられない。山を楽しむという目的であるなら、頂上を極めなければとか、大縦走を敢行しなければならぬということはない。テントを撤収し、荷物のパッキングも終え、サブザックに食料と飲み物と雨具を入れ、カメラを持って高根ヶ原に向け出発しようとしたらメールの着信があった。



ここは圏外のはずで、タベも圏外だったのにと思いながら見ると、同僚からだったので、悔しがるような内容の返信をした。出発してすぐに大型の花のチシマノキンバイの群落に驚き、今が盛りのエゾツツジのクリームソレーキの絨毯、エゾツガザクラの群生が高根ヶ原の広大なスレートに広がり、常に前方にトムラウシ山が鎮座している。まさに鎮座という言葉がピッタリで、このトムラウシ山は大雪の連山の中でも他の山とは違う崇高な雰囲気醸しだしており、右に十勝岳連邦、左にニペソツ山と石狩岳連邦を従えて、大雪の奥座敷に鎮座している。登山者にとって憧れの山となっているのは当然と言える。高根ヶ原は起伏のあまり無い瓦礫の風衝地帯で、灌木すらないので遮るものは何もなく、様々な高山植物が咲き乱れ、その花越しに遠くは雌阿寒岳と阿寒の山並みまで眺めることができる。コマクサは雑草だったのかと思えるほど至る所に無造作に咲いている。大雪山は「神々の遊ぶ庭」と言われているが、じつに言い得ていると思った。人間もこんな所で走り回って生きたいものだ。

高原沼を見下ろせる崖っ縁で熊を観察しようと腰を下ろして眺めていると、隣の親子連れのテントの父親がやってきて、「熊いないか」と話しかけ隣に座った。雪渓に出てくれば目立つのだがと、暫らく観察していたが熊は現れない。鳥取から来たというこの男性は学生のころ山岳部で、登山といえば剣岳とか穂高連峰などの難易度の高い山を登ることで、なだらかな北海道の山はワングルの人達が登る山と考えていたらしい。しかし、歳と共に、このような本州にはない雄大な山を楽しむ傾向になって、娘が北海道で学生のうちに毎年登っているそうだ。この高根ヶ原は初めてだが毎年来てもいいと言い、3泊する予定だったが天気も崩れそうだし、娘も帰りたがっているので下山することにすると、テントサイトに引き返して行った。

まだ時間的に余裕があるのでもう少し奥へと歩いて行くと、関水さんが戻ってきた。どうやら忠別岳の少し手前まで行って戻ってきたらしい。11時ごろテントサイトで落ち合う約束をして別れ、もう少し奥を目指した。ホソバウルツプソウは咲き終わっていたが、大きさといい密生度といい、小泉岳方面のとは比較にならない。来年以降の楽しみができた。畳2枚くらいの平らな大きな岩があったので給水と捕食を兼ねて休憩した。ここまで3時間弱、この先はこの次の楽しみにと大岩の写真を撮り、帰路はほとんど登りとなることを考え、ここで引き返すことにした。



雌阿寒岳方面の山並み



エゾツツジ



コマクサと後旭岳(手前)旭岳(後方)



高原沼

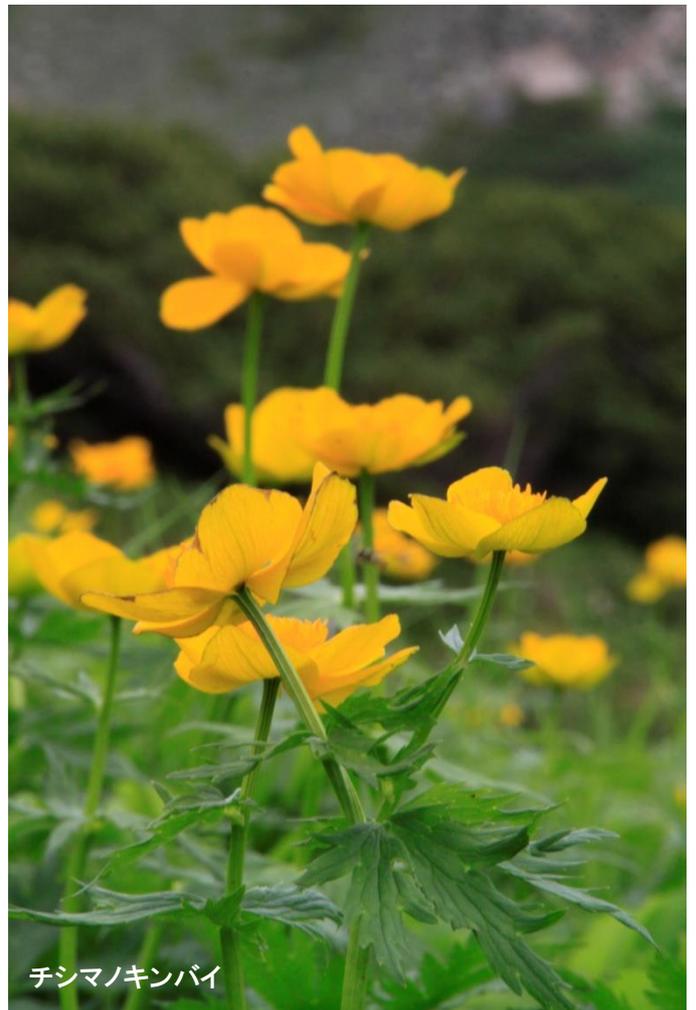




チシマノツガザクラ



キバナシオガマ



チシマノキンバイ



チシマギキョウ

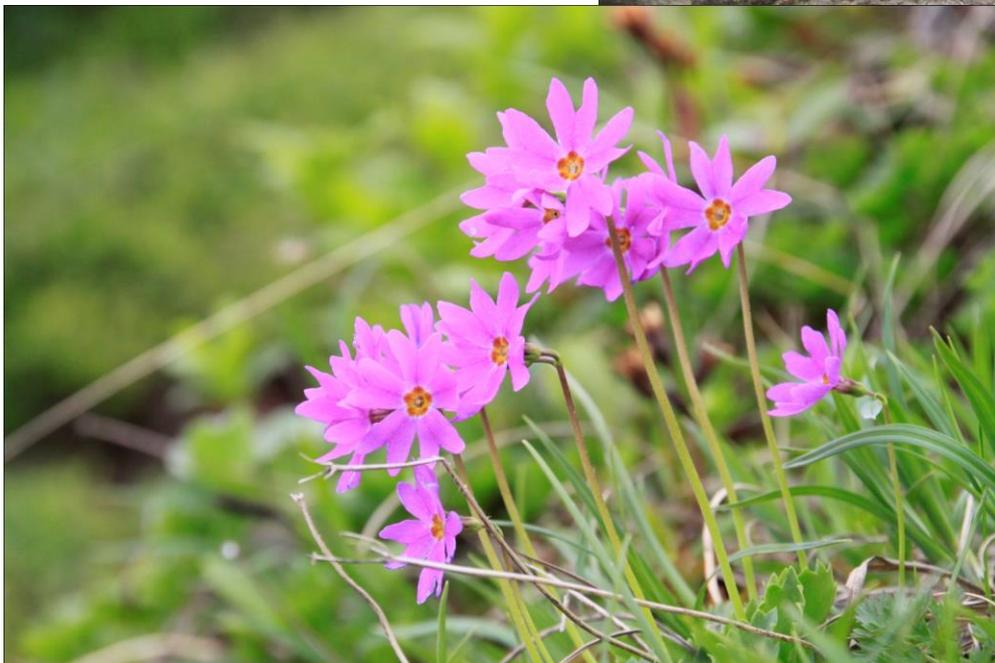
小泉岳付近に行く(関水さん撮影)



帰路の登りは途中で暑くなりTシャツ一枚になった。雪渓からの清々しい酸素一杯の空気を吸い込みながら急いだ。テントサイトに戻ると、関水さんも戻っており、昼食となった。今日のお昼はカルビ丼とみそ汁だ。フリーズドライの食品は全て予想以上に旨い。関水さんにじゃがいものスープまでいただいたのでお腹いっぱいになった。そして、なんと銀泉台に止めてある関水さんの車で富良野まで送ってもらうことになった。バスと電車を乗り継ぐと富良野着が22時ごろになる予定だった。銀泉台からのバス時間も気にしなくてもよくなったので、益々気持ちに余裕が出来て、下山も十分に楽しむことができそうだ。テントサイトから白雲岳分岐までの30分の急坂の登りは、高根が原のサブザックでの歩きに慣れていたためか、15キロのザックが余計重く感じられた。銀泉台までの2時間はそれぞれ自分のペースで降りることにして、関水さんは先に降り、私は写真を撮りながらのんびり降りることにした。しかし、15kのザックを背負いながら花の写真を撮るのは意外と辛い。花は低いカメラアングルで撮る時がほとんどで、膝をついての撮影となる。つまり、15kのウェイトを背負ってのスクワットの連続だ。何年か前に、黒岳から銀泉台に縦走した時、赤岳の大雪渓の下付近でツガザクラの赤とハクサンイチゲの白の大絨毯に感嘆したのを覚えているが、今回は見当たらない。時期のせいかな、それとも花そのものが少なくなったのか気になる。駒草平のコマクサは相変わらず一面に咲いていたので安心した。休憩を兼ねてザックを下ろし、コマクサの花の撮影をしていると、小さな蜂のような虫が飛んできて、花の付け根に長い嘴のようなものを伸ばして差し込んでいる。コマクサの花の付け根の両側には、ほとんど小さな穴が開けられていた。今まで気がつかなかったが、これがコマクサの受粉になるのだろうか。帰ってから調べることにしよう。コマクサの葉を食草としているウスバキチョウは登山道で死んでいたが、もう時期的に終わりのようだ。予想していたほどいい写真が撮れなかったので、関水さんに途中で追いついた。銀泉台と一緒に下山して冷たい湧水を飲み、予め用意していた登山書を提出して無事終了。



イワウメ



エゾコザクラ



赤岳第3雪溪



コマクサの穴

関水さんのレンタカーのマーチには自転車も積んであった。良いサイクリングロードがあれば走りたいと、たたんで飛行機に積んで持ってきたらしい。関水さんが然別湖を通りたいというので、三国峠、狩勝峠越えのルートで富良野に行くことにして、関水さんもロッヂ・アイガーに泊ることにした。北海道といえども手つかずの原生林が残っているところは少なくなり、然別湖周辺に広がるトドマツの大木の原生林に関水さんは感激し、車の窓をあげ、「トドマツの香りが気持ちいい」と喜んでた。白樺峠で突然の濃霧に驚いたが、狩勝峠を一気に越え、夕日を背に黒いシルエットとして浮かぶ芦別岳を眺めながら、予定より早くアイガーに到着した。風呂を浴びた後、食べきれないほどの肉のシャブシャブを食べながら、充実した山の2日間と何事もなく下山できた安堵感に浸った。食後、関水さんはだいぶ疲れていたようだが「雛」に誘った。ママの友紀さんとジュンに半年ぶりの再会を喜んだが、ヨシエがいないので聞いてみると、春に結婚して店を辞めたらしい。「雛」で飲む時は安心して飲めるが、山の疲れも加わり、飲むほどに酔いが回り、記憶が途切れ途切れのあり様だ。



関水さん



7月15日(木)

ロッヂ・アイガー(10:40) —北時計—D581—千望峠—L70—R452—L68—L37—旭川北 IC—道央道—士別—R40—名寄—道の駅びふか(12:30)(13:15)—音威子府—佐久—L119—遠別—R232—天塩—L106—サロベツ(16:30)(18:30)—こうほね P—ばっかす(19:10) ㊤ばっかす (321km)

翌朝、予報は雨なのになぜか晴天だ。携帯の予報でも雨マークは消え、2, 3日天気が続く予報になっている。道北に遡上する気分が盛り上がってきた。鮭の本能と似たように北を目指すのは、そこに未知の世界が存在し、その世界を垣間見たいという欲望であり、ライダーの感性なのかも知れない。「北時計」では時間的に今野さんと会えなかったのは残念だったが、「森の時計」のオーナーと釣り談義をし、馴染みの由井さんとお話をしながらおいしいコーヒーをいただき、一路北を目指した。富良野から国道を通らずに旭川まで行ける快適なルートを見つけ、旭川からは時間稼ぎに無料の道央道を利用した。



今日は久しぶりの長距離走だ。檻から解放された獣のように V ツインは咆哮を繰り返しながら疾走し、道の駅びふかで昼食をとった。今まで何度か北を目指したが、不思議にもほとんどここで昼食をとっている。中川から遠別までの30kmの区間ですれ違ったのは車3台と自転車一台だけだった。天塩のホームセンターで思いがけず釣りの餌を買い、106号線では左手でカメラを操り、日本海に浮かぶ利尻山を左に見ながらのんびり北上した。そして、予め電話をしていた梶原さん宅に着いたのは16時半だった。相変わらず柔和な笑顔で迎えてくれた梶原さんに、これまでのバイクの疲れも忘れ、遊佐から届いたプリンスメロンをいただいた。このプリンスメロンは庄内砂丘地の名産で、私の92歳の父も作っているが、父のメロンを食べるより先に、北海道のサロベツで食べることになった。そして、その後に牛乳豆腐をいただいたが、めったに食べることができないもので非常においしかった。牛の初乳を温め、酢を少量加えて豆腐状にしたもので、豆腐というよりチーズのようなものだが、そんなにコッテリしてなくあっさりしていて、日本酒と絶対合う。酪農家の所でしか食べられない逸品だ。長年の懸案事項だったサロベツの水害対策の一つのモウモウシェルターの問題はまだ解決に至るには程遠く、梶原さんは精力的にその問題に取り組んでいた。私も一旅人として傍観者の立場をとるのではなく、水害対策の署名運動を微力ながら引き受けることにし、署名用紙をいただき、後日、仙台で何人かの人たちに協力していただいた署名簿を送った。梶原さんに何うようになってから3年目だが、同郷のよしみもあって、ここに来ると実家にいる時のような気持ちになる。



106号線



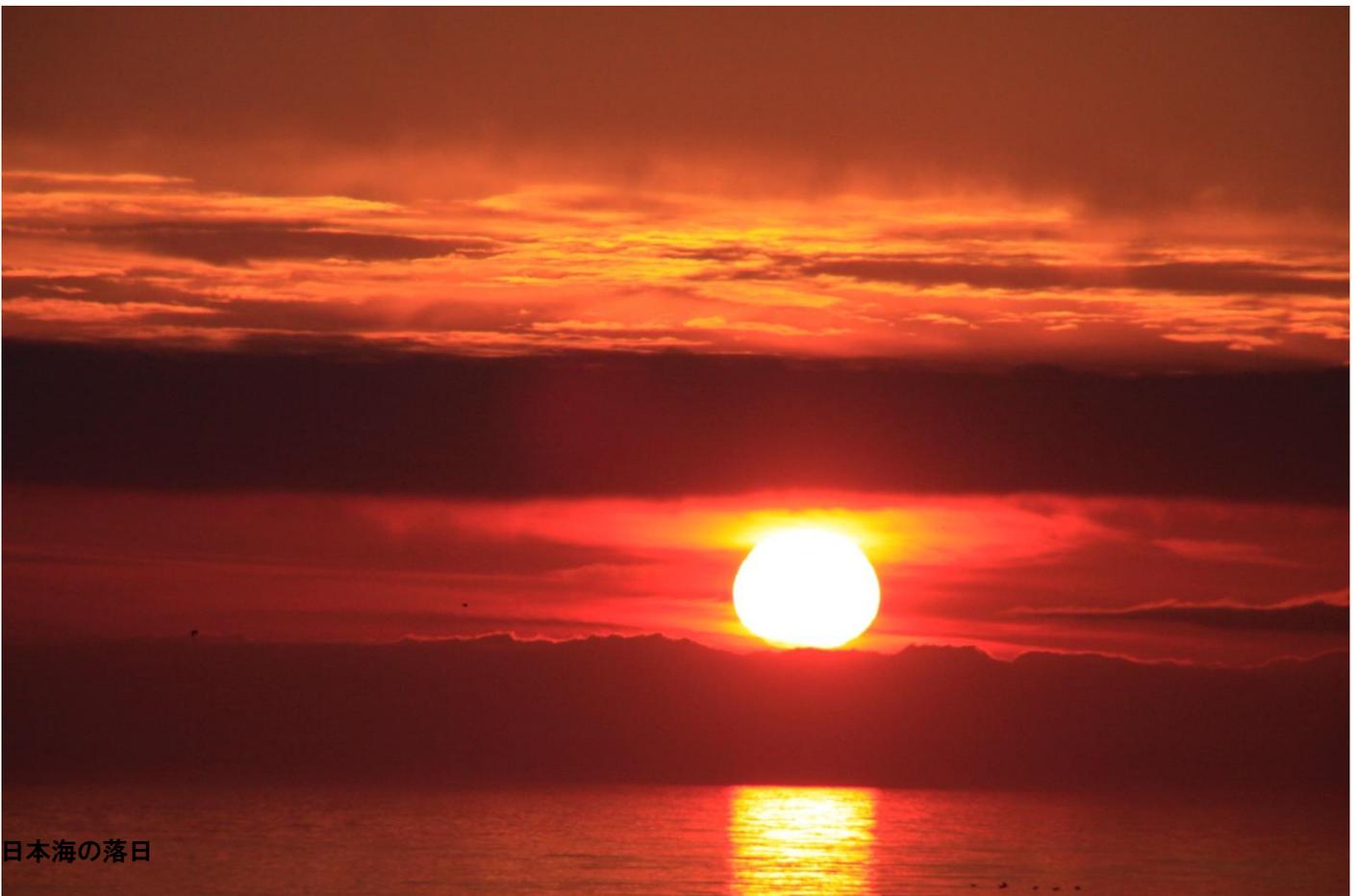


梶原さん宅



こうほね付近利尻山遠望





日本海の落日

思いがけないほどきれいな日没になったので、こうほね P で写真を撮り、ぱっかすに着いたのは7時をまわり、先客の旅人の夕食が始まっていた。ぱっかすの食事は毎回すばらしい。食材へのこだわりもさることながら、ポリュウムが十分過ぎるくらいで、肉じゃがは丼ぶり一杯だから年配者には多過ぎる。恒例の9時からの飲み会に、梶原さんからいただいた牛乳豆腐と、搾りたての牛乳をオーナーに低温殺菌していただいたのを出したが、6人の旅人全員がおいしといただいた。私は去年おいしいと飲み過ぎてお腹をこわしたが、今年は慣れたせい、今年の牛乳は去年より少し薄いように感じられた。オーナーがいうには、「去年より来た時期が遅いため、牛が生草を大量に食べているために味が違うようになったのだと思う」と言っていた。今年のサルナシ酒にオーナーは敏感に反応し、奥さんにほどほどにしたらとたしなめられるほど飲んだ。今が盛りウニは採ってすぐにミョウバンに浸けないと溶けてしまうことを初めて知った。ミョウバンに浸けないウニを食べさせる店が礼文島にあるそうだが、中古のSRに乗って2カ月ほど旅している20代前半の女性は、礼文島に数泊し、そのウニを食べてきたと言っていた。名古屋から来たという彼女は、免許とりたてで運転の基本的なことも知らないし、故障しないものと思いついでいるのだろうか。しかし、その行動力には感心する。



夕暮れの利尻山

7月16日(金)

ばっかす8:50—L106—D444—豊富—大規模草地放牧場—豊富バイパス—L138—L121R238—D889—宗谷丘陵—D1077—R238—猿払(12:30)(13:15)—エサヌカ線—R238—サロマ湖(18:10)

Ⓜ さろまにあん (400km)

洋上に浮かぶ利尻山を右手に見ながら、左手に持ったカメラで走行写真を撮りながらの片手運転でのんびり走ったが、沿道に咲く花の時期は盛りを過ぎていた。オーナーが勧めてくれた豊富の大規模草地は広大な放牧場で、その中を縫うように道が繋がっている。しかし、幾らスケールが大きくても所詮人工的に作られた景観なのであまり興味がわかず、最終氷河期の地形を残す宗谷丘陵へと向かった。宗谷丘陵からは微かにサハリンは見えるものの、水平線が曖昧で、丘陵の鞍部越しに見えるはずの海が見えない。鞍部から見える逆三角形の海の青が、荒涼とした宗谷丘陵の緑にインパクトを与え、絵画は完成するのだが今回は諦めた。ここも片手運転で動画を撮りながら走ったが、交差する車はない。



ばっかすオーナー

夕来展望所







宗谷丘陵

道の駅さるふつのホテルは、大型バスから降りて昼食をとる観光客で賑わっていた。この猿払村は漁業を中心に道内でも数少ない黒字の村だと、サロベツの梶原さんが言っていたが、私の実家の遊佐町と密接な関係があるとも言っていた。猿払沿岸を回遊する鮭のなかでも最も上等の「めじか」という鮭に、標識を付けて放流したところ、全ての鮭が山形県遊佐町の牛渡川に遡上することがわかり、遊佐町のことを「めじかの里」と呼び、以来親交を重ねていると言う。「めじか」とは大人になる前の脂肪ののった鮭のことを言い、鮭のなかで最もおいしいと言っているのので、その話の内容からどうやら「めじか」とは「鮭児」のことらしい。鮭児は大きいものだと一本10万円くらいで売買される超高級魚だ。



エサヌカ線とオホーツク海



エサヌカ線の直線道路

北海道で走ってみたい道の上にあげられるエサヌカ線は、オホーツクの冷たく硬い青色の海を左に見ながら、海岸の原野と牧草地をどこまでもまっすぐに突き抜けて空に舞い上がって行く。たまに来る対向車は遥かかなたの蜃気楼の中から浮かび上がり、少しずつ大きくなりながら時間をかけて近づいてくるが、距離感が完全に麻痺してしまう。

宗谷国道を走る時、必ず立ち寄って休みたくなるマリーンアイランド岡島に寄り、一杯300円のカニ汁を頼んだが、ことのほか旨かった。真っ黒に日焼けした少年と思っていたチャリダーは少女だった。前後に荷物を満載した自転車のそばで、半ば放心状態で休憩していたが、今時の少女の傾向からは考えられない座標軸にあると思う。もうそろそろサロマ湖だと思ってからいい加減走り飽きた頃、見覚えのあるさろまにあんに着いた。この食事も地物を使っての家庭料理でおいしく、特に北海シマエビはこの時期おいしい。そして、オーナー夫妻も一緒におしゃべりをしながら夕食をとるのが家庭的雰囲気、旅人には好評のようだ。夜の飲み会は3人の旅人とオーナー夫妻とで始まり、新潟から毎年来ているという車の人が持参した46度の日本酒を飲んだが、以前、どこかで飲んだことがあったが、味は日本酒なのだがアルコール度からして蒸留酒なので、一気に酔いが回ってしまう。もう一人は埼玉からのライダーで、今日一日で600キロ走ったという若者だ。食べる時以外は走っており、北海道の道はそれでも楽しいと言っていたが、その気持ちはわかるがもったいない気がする。4年前、自分が泊った翌年に娘家族が泊ったことを話したら思い出してくれて、懐かしそうに話してくれた。そして、娘に預けて渡した旅行記を持ち出してきて、他の二人に見せながら話しは弾んだ。





さろまにあんオーナー夫妻

7月17日(土)

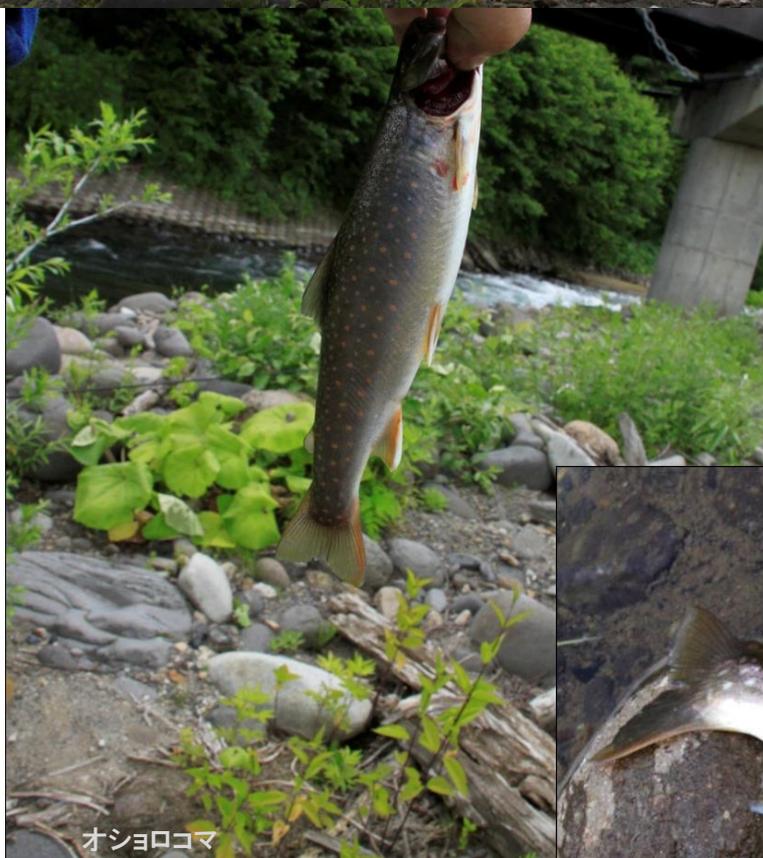
さろまにあん(9:30)－L103－留辺蘂－R39－道の駅おんねゆ温泉(10:30)(11:00)－  
石北峠(11:40)(12:30)－R39－R273－大雪湖－高原大橋…石狩川源流…高原大橋  
－R273－層雲峡(17:30)  層雲峡 YH (134km)

今日はオーナーに勧められた十勝地方のセキレイ館に泊る予定で留辺蘂まで走ったが、真つすぐ行けば最短距離で十勝地方、右に曲がれば大雪方面という R39 との交差点で、突然、大雪湖に流れ込む石狩川の源流の流れが自分の頭の中を流れた。既にバイクは右に曲がっていた。道の駅おんねゆで層雲峡 YH の予約をし、駐車場わきの芝生に座り込み、釣りの仕掛けを作り始めた。大物と対峙した時はほんの少しの糸の傷が致命的になるので、針も糸も新しく作り直した。通りすがりのおばさんたちが「お兄さん、何を作っているの」と聞いてきた。革パンをはいて釣りの仕掛けを作っているのだから、傍目には異様に映ったかもしれない。ここから目的地までの60kmは店も無いので、昼飯用のおにぎりを仕入れて走り始めた。

石狩川の源流からの流れが大雪湖に注ぐ橋の上から流れを見た。石狩岳と大雪山の雪解け水を集めて流れる川の水色は、いかにも大物が潜んでいるような色をしている。釣り人の感で、絶対にいるという確信に変わった。革パンからウエダーに履き替え、クマよけの鈴と熊撃退スプレーを身に付け、興奮と期待と不安のなか、川への降り口を探したら、既に踏み跡の道ができていた。釣り人の考えることは皆同じだ。橋の下までは熊も来ないだろうという安心感のもとに、期待を込めて餌を流した。全く未知の川での最初の一投目は、期待と不安で自分の鼓動が数えられるほどだ。息を凝らして流した 2 投目、目印に微かな変化があり、すかさず合わせると、何度経験しても気持ちが昂ぶる感触が右手に走った。しかし、大物ではない。透き通った流れを切って上がってきたのは朱点が妖艶なオシロコマだった。下流のポイントを目指そうと川を横切ろうとしたが、見た目より流速があり、危険なので諦めて上流を目指した。河原が広いところから察すると、大雪山と石狩岳に降った雨を集めて、川一杯になって流れ込む時があるのだろう。橋から離れるにつれ魚体はよくなるが、釣りに集中する以上に周りの気配に敏感にならざるをえない。歩かないと鈴は鳴らないので餌を流している時でも片手で振ってみたり、熊撃退スプレーの位置を確認したりしながら上流を目指した。対岸が少しえぐられて鬱蒼としていて、適度な水深と流れがあり、水色からして絶好のポイントがあった。まずはセオリ一通りに手前から流したが目印には何事も起こらない。2投目は核心部を流すことにした。思っていたところより僅か手前になってしまったが、ピンクの目印が上下に小刻みに揺れている。一呼吸おいて強く合わせると、獲物は重く静かに動き出した。底へ底へと強烈な引きが始まり、竿を満月に絞り込む。時には流れに乗って強烈な引きをみせたり、フェイントをかけるように突然沖に向かって走りだしたりするが、その度に竿を立ててひたすら耐えた。この鈍重な引きは間違いなくアメマスだ。仕掛けは 1.7 号の通しなので切られる心配は無いが、針がどこの部分にどのように刺さっているかが心配だ。漸く水面に顔を出してきたがやはりアメマスで、針も右上顎にしっかり掛かっている。こうなればこっちのもの、余裕を持ってタモに収めた。まるまると太った天然のアメマスだ。釣り上げた瞬間の魚体の美しさにはしばし見とれてしまう。冷たい雪解け水の激流の中を生き抜いてきた魚体のプロポーションは、機能美に満ちている。大きさは自己最高を上回るものではないが、実際の大きさ以上に大きく感じるのは、釣れたロケーションに影響されたようだ。まだ上流にも良さそうなポイントがありそうだが、釣りどころではないという熊への恐怖を急に感じたので、急いで戻ることにした。オシロコマ3匹と良型アメマス3匹が今回の収穫で、一番大きいのは35cmだった。



石狩川源流



オシヨロコマ



アメマス

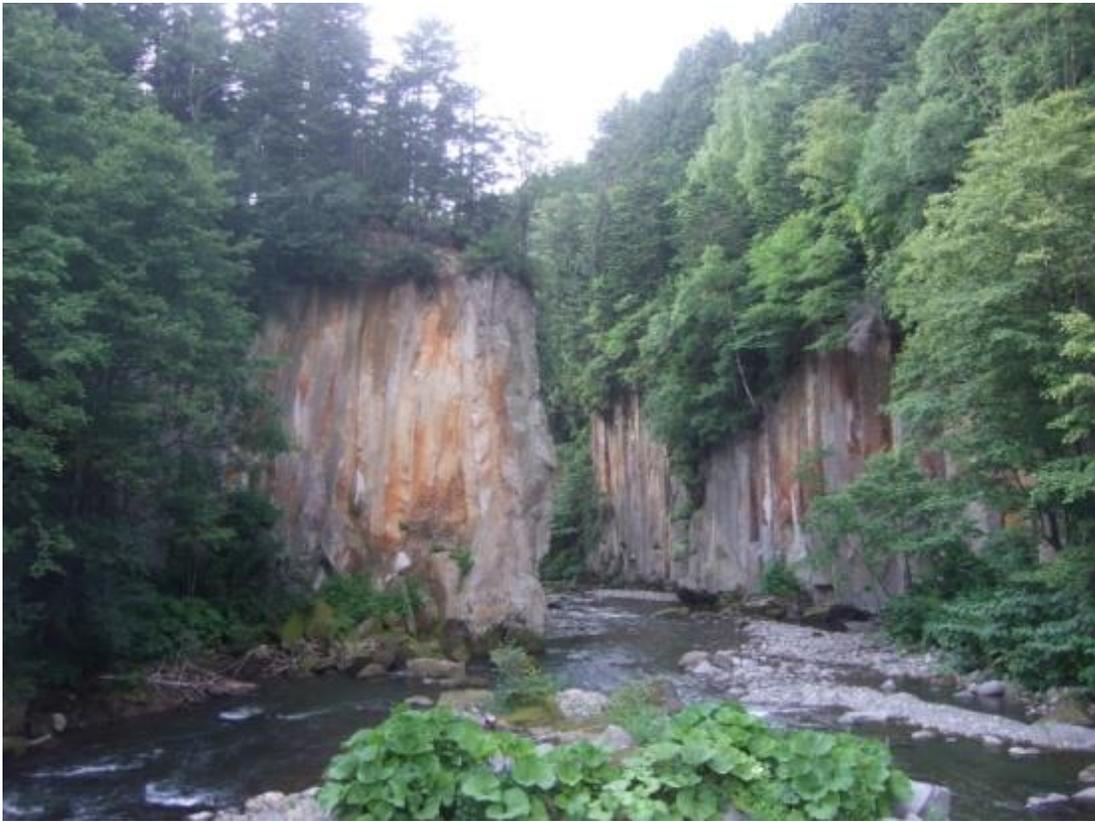
まだ時間的に余裕があったので、釣り慣れた層雲峡でも釣りをすることにした。観光客の視線を背にしながら流していると、すぐにあたりがあり、魚は走りだしジャンプを数度試みたが、ギャラリーを意識して必要以上に時間をかけて取り込んだら幅広のニジマスだった。

層雲峡 YH はすごい混雑だった。山の人たちもさることながら中国系の観光客が多い。レストランも混みそうなので夕食は後にして、このユースに泊まる時には必ず利用する隣の朝陽亭ホテルの温泉に入ることにした。7階の展望風呂から眺める層雲峡の岩峰群は夕日に映え、今までの疲れを癒してくれた。

空いた YH のレストランで風呂上がりのビールを飲みながら夕食を食べ始めたら、一人の中年の女性が「こいいですか」と前に座った。東京からの一人旅らしく、いろいろ話しかけてくるが、こちらは今日の石狩川源流の釣りの余韻に浸っていたので生返事をしていった。私が愛想のない対応をしているとみるや、その女性はトレイを持って席を移動していった。そして、愛想のよさそうな話し相手を見つけ、食事の時間が過ぎても大きな声で話し込み、あげくのはて、中国系の人にまで話しかけていた。一人旅なのに一人でいられない人のようだ。



層雲峡のニジマス



層雲峡大函



石狩川のアメマスとニジマス

7月18日(日)

層雲峡 YH-R39-愛山・上川 IC-道央道-旭川北-R12-神威古潭-L57-L47-R275

一道の駅田園の里うりゅう(13:25)(14:00)-ゆき・ふる・里(14:20)-D432-暑寒ダム

-ゆきふる里(16:20)

H ゆき・ふる・里 (146km)

朝から雨が降っているが、山の準備をして出発する人が多い。ロープウェイとリフトを乗り継いで、景色がだめでもせめてお花を見ようということらしい。今日の天気予報は降ったり止んだりの繰り返しみたいだから、雨は覚悟しなければならない。同室の4人のうち3人はライダーである。若いライダーはそそくさと出発していったが、熟年ライダーは自分同様のんびりしている。小田原を6月初めに出发して、日本一周を目指しているそうだ。今年3月で定年退職をし、来年からは働くという条件で、この1年は自由にさせてもらいたいと奥さんに話し、「お前も行くか。」と聞いたら、「私はやることあるから一人で行ってきなさい。ただし、12月中には帰ってきなさい」と言われ、「しめた、バイクで行ける」と内心喜んだと言う。普段乗り慣れているセローで旅しているそうだが、パワー不足は予期していたもののその反面取り回しが楽で、故障しても自分で対応出来るから便利だとも言っていた。体が言う事をきくうちに、やれることをやるのが大事だからと、バイクで走るだけでなく山にも登りたいと、自分と同じようなことを考えていた。利尻山は苦勞して登ったと言い、東北地方の日本海沿岸を南下する時は鳥海山を是非登りたいというので、その山は私のふるさとの山で絶対お勧めするからと、一番好きな滝の小屋コースを教え、鳥海山荘に泊まると良いことも付け加えた。

YHを10時頃出発したが路面はもう乾いていた。R12を思い出のあるカムイスキーリンクススキー場を眺めながら神居古潭に寄った。子供たちが小さい頃、北海道をキャンプしながら回ったが、神居古潭に寄った記憶があるのだ。川岸に大岩があるのは昔のままで、昔の道路も一部分残っていたが、すっかり観光地化され整備されている。昨年、お世話になったゆき・ふる・さとには昼過ぎ着いた。ここでの釣り場を開拓しようと地図を何度も見つけ、石狩川の下流での支流になる徳富川に行こうとオーナーに話したら、暑寒ダムの下で大物のニジマスが釣れるという情報を教えてくれた。釣り情報ほど当てにならないものはないが、せっかく教えてくれたので行ってみた。そこはダムサイトの放水路の吐き出し口だった。釣り場の雰囲気は良くないが、大物がいそうな雰囲気はしたので餌を流したら、すぐに小型のニジマスが釣れてきた。大物とはほど遠い唐揚げサイズばかりで水の色も濁っているし、雨も強くなったので止めた。川に降りるときには気がつかなかったが、ダムサイトは危険のため「釣り禁止区域」の看板が立っていた。オーナーにそのことを告げ、客には進めないようにと話した。今日の客はライダーが3人、夫婦が2組、ミニクーパーの一人と8人で、一緒に夕食を食べたが、ここの食事も良く、北海道で一番うまいブランド米の雨竜米をはじめ、裏の畑でオーナーが作っているこだわりの自家製野菜と近所の農家から分けていただいた野菜を中心に、健康的な食事が食卓に並べられた。



ゆき・ふる・さとオーナー夫妻



石炭の歴史村



夕張バリ屋台村

## 7月19日(月)

ゆき・ふる・里(9:40)ーR275ー月形ーL6ー岩見沢ーR234ーL3ー夕張・石炭の歴史村(12:20)  
(13:40)ーバリー屋台(13:50)(14:30)ーR274ーL74ー穂別ーR237ー二風谷ー日高富川 IC  
ー日高自動車道ー沼ノ端東 ICーD259ー苫小牧フェリーターミナル(16:45)  
(19:00)ー太平洋フェリー(木曾)ー (243km)

今日は苫小牧に5時まで着けばよいので、時間に余裕が有り過ぎるくらいだ。岩見沢から夕張に入ると、石炭の歴史村の看板が目にとまったので行ってみた。大駐車場が一杯の花畑牧場の隣にある石炭博物館は閑散としていた。1200円の入館料は少し高いと思ったが、夕張の再興に少しでも役にたつかなと思いながら入ってすぐ、重さ3トンの黒光りする「黒いダイヤ」の塊に圧倒された。良質の石炭であるが、造形作品のような威光さえ漂っている。良質の石炭が採掘されることにより、辺境の地に瞬間に人口13万人の都市が作られ、そして、エネルギー革命により瞬く間に衰退を辿り、財政再建団体となり、再生への取り組みが続けられている。まさに、時代に翻弄された結果になってしまったが、今、石炭の新たな利用が研究開発されているようだが、もしもそれが実現すれば、夕張の埋蔵量からして、賑わいを取り戻すことに繋がるかもしれない。まっくら探検・史蹟夕張鉱ではヘルメットにヘッドランプを着用させられ、竪坑ケージのエレベーターで地下1000mの坑内に入る疑似体験をした。天然のクーラーの坑内は涼しく気持ちが良いが、ヘッドランプに浮かぶ坑内は閉所恐怖症の人には耐えられないだろう。お昼を夕張のバリー屋台村のなかの蕎麦屋で、名物のカレーそばを食べたが、稀に見るおいしさだった。ところが、本場の夕張メロンを隣の店で食べたが、ネットの張っていないあまりにもまずいものだった。口直しに以前おいしいメロンを食べた店に行ったら閉店していた。平取の二風谷で、孫達のお土産に、まゆみの木で作った木彫アクセサリーを購入し、苫小牧港には5時少し前に無事到着することができた。仙台港行きの駐車場に、今まで見たこともない50台以上のバイクが並んでいた。今回の船は「木曾」で快適だ。「木曾」の料理はおいしく、とくに焼きたての牛ステーキ、サーモンのにぎり、大根煮はおいしく、赤ワインがまたたく間に空になってしまった。



## 7月20日(火)

ー仙台港フェリーターミナル(10:00)ー東部自動車道ー南部自動車道ー山田 ICー自宅(10:30)  
(25km)

今日は訳あって職場に出なければならないので、金華山沖の洋上から電話で遅刻の連絡をとった。幸いにも、バイクの乗った位置が良く、一番に下船することができた。自宅ですばやく着替えて11時過ぎには職場に着き、何気ない顔で仕事をした。そして、翌日から25日まで月山でスキー合宿というハードスケジュールをこなさなければならなかったが、大自然のもとでの苦労は苦痛には思えない。

道内走行距離 1698km  
総走行距離 1748km